関ヶ原軍記

二編十三

十四

特へ遠13
2207
22

飜譯書　繪本　山亭馬琴之作 其外諸先生作
倭軍書　書本　軍書 敵討 諸家騷動 御捌物
唐軍書
隨筆物
國々名所
近世戰爭書類　滑稽物

右之外數品古庭山房秘蔵之稿奉願出也

東京牛込細工町
誠文堂　池田孝清

書物演出本所

門へ遠13
號2207
卷22

牛込本
池清

関ケ原軍記武編巻之拾二

目録

一関東勢清洲を立て波辛へ押寄る事

一英雄田村の百姓ホ領主一揆を助る事

一百姓共一揆ら川瀬りの事

一関東勢清洲を立て波辛へ押寄る事

英雄田村の百姓ホ領主一揆を助る事

一百姓共一揆ら川瀬りの事

英国東勢一図川を渡る事

牛込 池清

東京都立中央図書館蔵書

英国ケ原軍記 或篇巻之拾三

英国東勢清洲を立て波乗（押寄る夜
英国田村の百姓東領主一柳隠物を
助けんと斗る事

去ほど程波乗中納言秀信
天皇より勅の勅諚を足波
されるる池田三左衛門輝政

軍令武川幸隆を押法
の時関東勢の清洲を出陣
する事 安房に打別れ
退き 相模へ押寄 北条
氏康 西則 加賀赤尾 細川
忠興 武田長政 田中吉政 その
外筒井 京極御軍代 井伊
直政 又蔵堂 虎を別して

内府公の御内定あつく軍
武 拙 川直政の御指揮をもつて
その せ 退き 軍令 武 西美
濃より出る 沼田 これ 出
所 年 永 義 を とり なつめ
尾城 を 渡 て 野 加 河 と 波 年
北 あ ぶ に 打 つ べ き
定 り 又 め 手 を 沼田

輝政 淺野幸長 蜂須賀至
鎮 山田一豊 堀尾信濃守生
駒 須賀守 松下 吉沢
有馬 松倉 遠藤 以下木曽川の
ほとりにおいてむかひうつ先
鋒を上くべき旨その
時を退手 櫛 一時に攻
をとるべ 家康 東西 敗北
をとる 双方一和手軍野戦
おいて いづれの勝負
るべ 勝負 味ひを言虎よ
後ども 何さまのちく
家を記 いろ の夏おも
べ 此 夏堂家 先
陣を夏堂仁右衛門同く野七
郎同く武郎 同く玄蕃 本真

勢二子舎人なり知りしの
時伊与氏國宇和郡の城主に
して八百石地頭
東照宮さま人の多き中にも
この虎を源蔵と
名付給ふ事も甚由緒
ある事なり別人に
勝れあつく不忘

の雪士なり今度この度
京合戦に新しくして軍功有
し大将なり壮年に時
い勇猛に生れ別土地
村の百姓の子なり姫めい
阿野淡路守に事公し 後
に 豊臣秀吉 に 波多く仕へこの
後大和大納言秀長に仕へ

備中の國冠山の合戦に
軍功有りて二百石を賜る
その後秀長に先駆をいたし
高野山にのがれて隠遁
しかるに古太閤御下し
なしくに七百石を賜わり
新参にして大功を立て
武名高く久しく浪人
して終に無ぶり
しかるに其後上方にて
良将にて中々無双の働き
ありしや年来そのうち
そい乗り有る
花のごとくなれば
とび込敵に戦ひ又九月
十又日より同夜の合戦に

いづれも軍功有りしかや

彼の慶長五年八月廿一日関東
方より池田輝政が一隊二百余人
江海の口をかためよとつけ川
口柵をかゆがひらるに木曽川
の流れも強くして測量の績
知れ難くあらんくとも

て流れを切り川幅廣く
地をなすもの川幅廣く
波高弊もむかひ比つゝ千
さくを造りて武千人百隊
人鉄砲玉をつべく待受り
きたるのうへ江海むれ
編麗堂平秀信のもとより
申ゐ手又武布をなりて野

つゝ塙ゝゝ波辛代ゝる山
聳へゝゝ中ゝゝゝゝ田ゝゝゝゝ
さゝゝゝり池田輝政 清理奉長
塙須賀勝政 生駒 金森一柳
遠藤 本多勝政ゝゝゝ
川端 松平 松平忠何
ゝ海ゝゝ ゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
見合ゝ奉関ゝゝゝゝゝゝゝ

きゝゝゝゝ一町余りゝゝゝゝゝゝゝ
籠城立ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
戸田むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
傾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
南ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

恩澤を知らう後に小田原
くらの寄手は中こ長尾
なんば是をうつるのうえ山の寄手
して此川の寄書物をさせ申
寄来れ作如恩地賜りて武蔵
のうぢやきの人数手をそべ東之
又氏川を是をうつ又六拾人も
るうんで越ぐらい行徳のう
う是べきるり日須川の寄手
い知りうり迎俵て百姓ども
又六拾人川原へ出うりうも
百姓共一本宮物ゞ川源りの寄手
者と知る事
并寄来野一同川を渡を申
日くゝ形くゝ関来の大軍川場く

立並ぶところ手一柳筥物
先陣より渡り城中より堀尾
信濃守 池田侯中より赤穂衆
門を出て[illegible]む交ふ形て
彼身ごの軍兵移豊城ふる
つて掛みつらうとくども
渡手打負くく入堀寄手を
七曉義討入べーと退ひ

く若陣中堀を越軍
評定あつて義掘の手ふぐり
うんあり退手は方の寄手福島
正則以下竹ケ鼻と攻ゆぐり押
向ひて戦うひを交ーうを
兵書に曰く功を立るい居れ
職ぶん孝をするいるの職
ゆ死を戦場こいう居い武

士は職分なれば
ものいふる人の常
ふるまひべき事なり
人をして苦を吟味せ
ざるべからず
此方に対する
已に増る者を求むべし
家を同じくする人なれば出合ざる

がうもあるごとく意角
能く人を事の時を強
事なりして吳見せうけ
月日にて吳れある友達来り
ぐ一日くる吳見されいちん
きたるを知るせば中秋仁
よりの使ひ仕るが徳
なり明日の命を知るぬ事

年過ぎれば老りて
ものそうぶ
一年のそうぶ
元日あり
元日より限りて春の
うちは永
楽
安楽
年代の勅
或ひ
年代の
のうに拾りて
法用

年一尚年
例年
日本国中
国月三十日
物ごとに
月を収む
年一月

臣下たる人の子たるものの孝
は立つるに大臣の根元なり
必ずしもその所以なり子
たる者父子孝は譲る元来
大孝なるべきを臣下たるものは
立つるにかしこれを公にして
大功を立てれば主人に忠は
見はるのこころなる故見ず

功名をばそれ我身にとく
ものく大きなる功を働きい
ずして臣下は職分なれば
主人を譲るべきの利なり
そのこころもとめ必ず孫は
重ねざれば主人を重
るもちろん父も元より
孝なりこれなべきの利は世

年父母の名地位なりすると孝
の孫なりせしかの竜角高名
地位なりすると孝はなりぬ
と打ち時父母なりの不足
なりのなりなる年
今はなりていの釈のあと
譲りの遠きをそなりて
きぶつまぐ父母の恩を礼

夫天晴他人年の祭りする
思人竜角を角みを父母を
孝君を忠節をつくして
その功をなりぬ拾く
きべし物して他人も
秋ぐきのいあしぐと
物毎年自慢し高慢
ぐいなく拾べぐば拾

京のこびれとうひとく
双方の義雪対元を働ホ
掾舞るりこれ俳へ手元を
戦場手当るい武士の職之と
いう語のごとく達う元武
かうこうへやうづく武
門の義こ伝てあり毒手
いう戦場手元をうけく

たくまい元へ手
知り言孫重也布也
いうたりつての和るる恐云
あり知りを元べき為とて
強くたくるうつて
あくば伝級を生きるゆる
也在尚代浪西のこうと
い布遠たるり今ゆも

親世子なりしが人ごろよ
元を何とも思ひ人ふ物
まく働くべきなり軍中
よい元を指んじて御働
くその内子強弱あり
彼く彼身中の秀信の舞
本い江海むし偏麗堂しく遠
く先陣を未造大事の使百姓

誠おもしろのあれめんくも
横城なるべく待撃べきり
この時長田村の百姓共い隠主
一柳監物を先陣させく武
名を彼ら也大名くせぐや
ら年寄如ら百姓を以ら指
人九ぐらふるりく実来
野ゲ二万余人の中と一奉度

やはり皇国物ぞのい義あり
うとおもはるるお中思ひたる
を見分るく大きうなりうび
百姓たい馬の前へ踏張して
身ごろ日ごろ此の意趣既に
出今報じ来るいぞや海う
せうなくもくもも彫ぶ
はうまうべしと門系ちち

のぞむ千一柳皆物を夷蠻如
若武者ここ外の前織し
ようひ同じ毛はうぶう
載武思ひ馬の七寸そうん
ゆるひ出るひ柳を
をうけく板あ
あぎ宗龍狗りんようげ
出川の先陣一奉皆物と

名のり逆巻流れを水路を立て
新田をんぐり起し巻大塚樋を夫
下知して人を指つかはす
三拾余騎くつばとるつ
べく打入とり雑兵或百余
人を同じく根絶く黒田村
の百姓共に一柳がるの口と形
甚好き看賞を撰く流

流りく新田を塚尾信濃守
これを見く一奉を案内者有
て流をぞやめんく知る
るく多八百人むく川
をるを知おく新田んで
流り新田を信濃守政
の金支同前備中守を士卒よ
離をくぐ一人綱織しの

繼ひと共一合見て棟梁なれば
一身に御家を遠き恵ひの家人
たの中にこころろの内西くい
家を繼けと同じく川へ赤
入きとり見ふろく懐地方
京去文書長山内對るも一豊
ろる松下ふと始ちとく
見へ常じと二万余人退く

川へ赤へく海りとりこの時
池田輝政ふ下れ瀬を見
つろひ流瀬之ゆ考へくちち
海きいとひい大海のるき
も濁よりふ江の流も遠根よ
流ろがし寄来野雲震
れぐとるる西へ川の見
も見へざるがざとく

池清

関ヶ原軍記二編巻の十二終

池清

池清

関ヶ原軍記弐編巻之拾四

目録

一 新加納合戦の事
并一柳監物雪戦の事
一 池田侍中働きの事
并波阜勢敗軍の事

池清

関ケ原軍記武鑑巻之拾四

新加賀合戦の事

并一柳監物雪戦の事

去程ニ小波羽勢佐竹次郎
常陸殿齊藤
左馬之介 阪部十左衛門 木造
小勘平 并びに石田方加勢川崎

たるを以て 桃原長兵衛 長人
も二千余人にて待うけたり
中にも百反帆前なる 木造大船
つゝいを双の雲士にして軍船
の達人なるゆへ士卒こゝ下知
して実に野に大軍をもつも
馬人の達者なるゆへこゞりて
勢りてい叫ぶこゑ三十

町ばかりにて小つゝの前こゝ
招を挙ひ中ふ寇兵乃見物
六百人川端まをんで敵を川
城まで海りの時鉄砲迎ひうち
て打たる事数知れず木造五反
乃内武者を揚つくり打振
待受二そを振武者として
まちうけこゝり初こゝ川岸近

[illegible]そのとも共
手負死人あまたぐし張
勢軍一枚楯ばかりつぶ連く燒
の[illegible]とかけるぐら押
海ら[illegible]ようの[illegible]
[illegible]共一柳監物
[illegible]武者乃雪ゐ川乃棄間
[illegible]百姓[illegible]郷[illegible]

数[illegible]
[illegible]一文字に押[illegible]
[illegible]小物乃一柳[illegible]
目も拔[illegible]や角[illegible]
監物[illegible]向乃[illegible]
[illegible]て氏川の先[illegible]一柳監物
[illegible]と名のり[illegible]水[illegible]
[illegible]一時[illegible]三十余騎

輕捷のこと成揚くく一文字に
鉄砲を入まつり川揚へ使へしるは
芝浦より船にひゆる百度
木造丈人を差こくゆるしる度
るれば三町ばかりて鉄砲を
揚くく結まつり此廓是輕
たい深夜合さんとしる間よ
堀尾信濃守池田侍中るの丈

勢間の声と揚る有六百余人
の波乗れ是恒川揚の村中へ
崩まつり城内の竜竟の武
者又指待雑色六百余人手て
まちうけつり曽物下知を受
鉄砲入まて退散せとるとを
めるせ川一ぜん捨まつ一番ゲ家
人大塚指支堀尾ゲ家人堤

又所方五つ人一ぢんづゝをむ
百姓が名主のうち武市善兵衛
といふものを手負にんで強を合
せ稼負逃てゝ又前四方五つゝ堀を所方
五つゝ人ぢんづゝをむく強を合せ堀を攝城
拆て例をとり第四ゝ逃さだ

組仕せゝく貢をとゝつ武市善兵衛
ゝけ来りて大隊を寄ふさん
ゝゝゝるゝゝゝゝと引和して
高甲を高ゝ撫ゝく討ゝり
ゝり強ゝ手又金兵武市何某
助け来りくゝゝゝゝゝゝゝを
もゝのゝゝゝて討ゝゝ
彼年方ゝ阪沼小助年ゝて

書がらとつてこれを上方
へ武雪を震ひ手を気量も
大ひ手きれたりしがこの
体と見て直ちに歌うれ能き働
きをなるものと小山の如く
黒煙りを立くくえむ大塚い
六十ばかりある老武者さい芸
きをしても居きたりて同じく

紙向の一柳監物これを見く
あれ大塚をうるれと下知し
るるより一番ゞ家人共助者
来る而安藤おもるもこれ見て
若者共小勢平を助けよと云
云葉の下より前田豊後
後田横右番つ赤紙陣羽織して歌
云人人を結を合せしより始る

小大塚と阪沼さきて向ひれ
勝負なりしが小助平の義盛
この武士ばかり槍を更ぬ武市
見参を討えてるまへ大きな
つれ槍小助平こうれ
なりこの長阪沼小助平大きな
実東野代中こ鬼神と見へ
大塚槍を更ぬ小助平が討

えてこの強さにて実東方
代大将をも討ちこの勢を
ば見ぶ出大将乃実検まへ
よこ呼ばれなれば知らと
盗井七郎このをとりて
るて打のりて知いぶ一押陪
拘られを見くこのこの歌の
振舞の邪大塚が首とば長下

手敵を海へ追ひ落し七寸の
拍髪に馬をあてゝとりて手首
のもぎ一本質物ぶりと追ふる
盗井も夢中なる知るものすて
大刀を形長追せぎるもの
ありとすると引返してとり
あり質物を力尾きいひ妻双の
賣物なれば推条なり太刀を

抜よりぶとて馬に強奪せ
横抱手を引ぬんぐりし
ぐるより高を高なりもち
く盗井ぐをと討く大塚ぐ
首上を掃へるふ打のり身
抜ぐしるとろへ敵七
八騎矢来りて風むを太刀い
宮上の切物なるり心ねるとを

之時を切くに蔵を開き
監物に六七箇所を負ひられば
既に討死をもとべきところよ
家人石黒九郎兵衛一番乗仰
ゆ下十騎ばかり打ちまはりて
主人城内ふかけ引きぞく
監物がこの時のたゝかひ
百人不尚といふべきあり此

雑兵先に雑兵乃川際のうちち
城内に入家来三人金澤
岡の声をしくに押寄られば
こゝもとへ寄せ
乃百度城前の
の夜明を家来の人くして
場所をば門を除け合せ
お働くたりさいく苦一柳よ

樵立て軍を戻す所に
敵くと見へ手すり

池田侍中ゟ働きの事
并波阜野勢敵軍の事

扨そもの節阪浜小勘平を
いろ〳〵源く数中へくく
お働く時ゟ向の長はよ

馬引立くてゐらるゝ通られ
大勢ゟ見へくゝり手形野へ金
小札縅ゟ
鍬形打ゟる兜をいくゝ紀藤く
ゟ士ゟるけれども美麗成る有
さるゟて兜の建物ゟ胡蝶の
二羽連れ金ゟ打ゟさてい
池田侍中どのゟんはくゝ城

あらく堪ずに、ちゃうせんと
おもひ御大将
をとこをを撫
ぬるうりとる
会さうとうろ
よ立場逆来り
うりのうり奴
んといふぞ彼中
て手を立返
双方とも手
下限り手合
尺ばかりしが
ん阪沢を強
居ずと外
を捨て
対んとしう

て手を立返ふといひさまふ
双方とも手利るをばんぶん
下限り手合て猛勇もいまだ
尺ばかりしがいうぶ仕り付
ん阪沢を強く接ぶて尾
居ずと外しうり彼中を
を捨て走り寄り首地
対んとしうる時阪沢をうろ

はずりと歟しまして横抱こ引
組んずりこうるに値申る常
まれさまで強勢の人とも見へ
ざりしがさて組またるみ
ちより此時手こそ大力と知
もこれ彼くし小動平が上帯を
抱んでさしあむるさまを
投られしふり扶ち七ん

扶木して伴よ縁を傷手声を
ケ海ちいづもそうう者
なりやと完ふと知るんその
首討とりしり通なの
大将流石よ輝政の勇勝へ奔
のるかどるると感じ事利
彩ったろへ堀尾信濃守
細民弱大事つ 池田四郎大事つ

と先手として武千余人おの
れ来りて相戦う彼兵ども佐
渡方次郎ヲ武雪之丞
いくたりの時に矢形さま
より俄く城ぐる籠を勇
大ひさぐめ敗く敗軍を
立より此時こそ池田輝政い
勢軍と下知して二百余人平
勢りに切り戦ひ
より此時御軍代本多中務
殿下知をうけ敵を敗軍
いろ尺くうち北秀信の籠本
まで追籠せしもとみ戦ふ
ゆく百姓城ヲ
ふる手勢と
頁軍と尺切
く木造左馬佐

が俵にて奮戦
今の時に及び元来軍の
法度を知りて
ものゆゑ新の
ゆゑに討果すべし
時を籠城
を組織り
退く大将秀
吉は

援兵戦ひを
いどみ
矢を
矢雨
偏に軍法の利を知る
軍
門
偏麗堂の
百姓越

いろの物を一所にすべしと
下知しけるに掘出たる作蓮
佐竹ゝ真壁ゝ小田ゝ
敵ゝ目ゝ陣ゝ大軍ゝ大
勝れ平ゝ
敵軍ゝ
制ゝ

既平物級軍ゝ
実来野ゝ揚ゝ
名ゝ
級也ゝ
ゝ
木造ゝ作
津田ゝ
ゝ

ゝ作
高
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

由急度のみ急ぎ退ざるべ
し時大將秀信の籠本より物
見として佐々孫三郎家来り
く軍法次第と呼掛けいそ紀
家廣して兵令味方勢級軍
實来野に備へを那て退対
城法ゆまつる通なん此節一戦
仕はらぶ怪く勝利きべしそいう

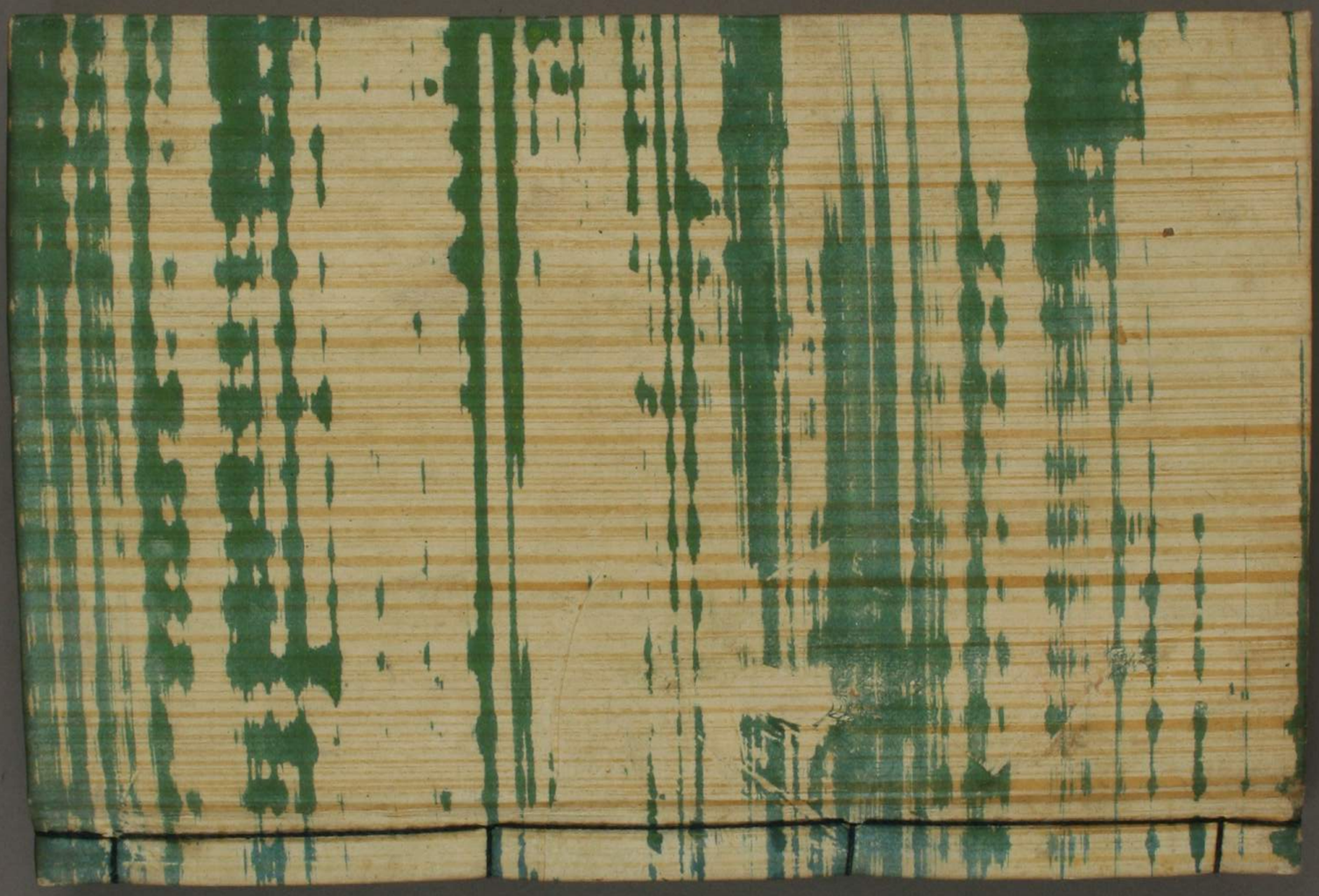
て秀信の籠奉行中鴻勢な
為つ同く傳右衛門ふるのせり
きる本こ兵令せてゆし
るい城後家御先地仕る
ぶよるり城秀り去為佐も
定めて力とそ去ふき
中べきるり佐籠中と出し
ゆへと命めけるふ出陣人

赤星門指さしやうく出でゝ
城をあらん芸元来大怪病者
有此暑大ひ年繰ぶ者も何
とて部屋中さゝやゝ揚りて
ゝゝ実東野の鯨波の声を
向西ゝやいそ地の籠城地迫
ゝ日ひ重ひゝく勝利ある
ゝゝとゝあらり考経ゝ父

親年仰合ぬ人ゝゝの時大ひ
ふ驚ゝん此ゝゝ乱暴して
敵城防ぐべしとて籠ちゝ
さんゝゝ忽ち勢級軍ゝと
く編麗堂に居合せゝゝ軍
ゝどゝ主人ゝを指く城中へ
入ゝ又ゝ義如ゝようて城へ
のゝゝ出ぐゝ俄り塞ぐりて

大将秀信をうぞ紀州の事
叶はざるのうちまもり津田反
之助を武者奉行の御厨の
ちうひと見し秀信乃帰馬
北路をしあり百反 木造
の衆人もうの所まで来りし
平をうりうれうりうの
信をい漏るまじうて一時に

強攻のうあげく大返し
平えうく返し我うひとうで
ん方うをうる関東勢猪時見
合うる間秀信をうで津田反三
郎兵衛をして入城をうる城あり
大事の体も法をいのうて
ちうく入城をうぢめに一万
人平あるる軍兵共も今うの

時と取りて御方三百余人
あり手負ひ皆武者と加て
船まで追の日も等閑なく
寄来野合の勝利を十分
なり彼方敵やせんを
上来ぶ井伊福島其他も
来たりて野加州の新田橋
より二里ばかり宿陣

堀責を明朝の刻と相定め
用心厳敷を所々に